



大相撲の阿炎関は3場所出場停止となった時、関取の地位から幕下五十六枚目にまで陥落しました。関取(十両以上)と幕下以下では雲泥の差です。身につける“まわし”は関取は正絹ですが幕下以下は黒染めの木綿製です。この時期のことを肝に銘じるために、阿炎関は関取に返り咲いた後でも、黒い絹の締め込み(まわし)を用いているということです。

古文書の翻刻 文化財ボランティア活動

平成30年度(2018年度)から始まった文化財ボランティア活動は、コロナ禍以前は遺跡発掘や社会科学学補助、古文書クリーニングなどに参加して頂きました。コロナ禍に入ってから開始した在宅活動の一つとして、旧東方村中村家文書の中から数点の翻刻(活字にする作業)をお願いしています。その一部をご紹介します。

【御定書写】(右の史料)

寛保2年(1742年)に出された法令を、当時の中村家当主・智栄が延享3年(1746年)に筆写したものです。回覧されてきた「御定書」(法令)を名主として書き写したものでしょう。この頃、中村家は財政が逼迫していき、寛延2年(1749年)には智栄は名主役が勤められなくなって田畑家財を売り払い離散したと別史料の家譜に記されています。《一度目の没落の危機》

市指定文化財の「旧東方村中村家住宅」は智栄の息子である智宗が安永元年(1772年)に建てたものです。

【修斎編】(下の史料)

嘉永7年(1854年)に中村義徳(重貞、培根)(1818~1876)が孟子などの言葉を引用しながら、家族の在り方などを書いたものです。(36歳)この頃義徳は名主を勤めながら塾(寺子屋)で教授しています。

【原史料】

【現代語要約】

関八州(関東地方)域内からの訴訟は幕府領、私領共に勘定頭で最初に取り扱う。ただし、寺院や神社の土地での訴訟は寺社奉行が行う。近畿地方については大坂町奉行所で扱う。

関八州方申出ル公事御料私領共御勘定頭初判、八州外者御料之分ハ右同断、但シ寺社支配ハ寺社奉行方初判出之八州之外私領ハ寺社奉行初判、五畿内近江丹波播磨(磨)ハ京大坂町奉行江訴出、・・・

【原史料】

【現代語要約】

人の貧富は陰と陽、昼と夜のようなものである。豊かな家の子孫は必ず困窮して飢えるようになり、貧しい家には必ず賢い子孫が現れて栄えるようになる。そうであるならば、豊かであることが頼りにしてはならない。貧しいことも心配には及ばない。

【翻刻されたもの】

人の貧富ハ陰陽昼夜の如し、富める者の子孫必困窮餓餒ニ及び、貧窶苦困の家、必賢良の子孫を生して栄発をなすに至る、然は富も恃むべからず、貧も愁るに足らず、況や・・・

まさに働き盛りで村政の要でもあった義徳ですが、この4年前に書かれた別の史料には隠居した養父・興治の生活保障や義徳の幼い弟たちの養育費などを保証する文書が残されています。

男子の跡取りに恵まれなかった興治は養子の義徳に家督を譲って隠居しましたが、この頃から中村家の家計は出費が多くなって身代が傾いてきました。興治は1855年に亡くなりますが中村家の借財は続き、1859年には四条村の飯島家に3両の借金をしています。寺子屋も経営していたとはいえ、名主の中村家が3両ほどの金にも困っていた様子が覗えます。《二度目の没落の危機》

「修斎編」はこのような状況下、興治が亡くなる前年に書かれたものです。義徳はどんな気持ちで家族の在り方を書き綴ったのでしょうか。

幕末頃の中村家文書は大きな変動期の村落の状況をよく表しています。特に義徳に関する史

料は地域の近代化の様子がわかるものです。この活動はデジタルアーカイブの整備の一環として行われています。翻刻していただいたものは、いずれデジタルアーカイブ上で閲覧できるようになるでしょう。携わって下さったボランティアの方々に感謝申し上げます。

今後も史料の調査、研究が進むように願っています。少しずつ地域の姿と歴史のスケッチが進んでいく様子が見えるのは嬉しいものです。そしてこの作業は単に過去を知るだけに留まりません。現在や将来の私達と社会の在り方を考える上で貴重な資料となるものです。

本質を突く児童の発言

越谷市が管理・運営している2つの中村家住宅での小学生の社会科見学の様子は前号でもご紹介しましたが、その後も数校の来館がありました。今号ではこれらの見学・体験での児童の発言をまとめてみようと思います。

大人もハッとする感想

★いいにおいがする！…《旧東方》大戸口から土間に入った時の複数の児童の言葉です。古い木材や藁製品の匂いでしょうか。もし^{かまど}竈があれば、薪を燃やした匂いも感じたことでしょうか。「匂い」も“展示”の一つといえるかもしれません。

★お寺みたい！……………《大間野》長屋門に入った時の児童の言葉です。くぐり戸ではなく、^{びょう}鉈を打った大きな両開きの扉を目にしての感想でした。



こんな疑問を持てる観察力と想像力

「どんな物をどのくらいの距離を運んだの？」



★この家はどうして木が多いの？

現代住宅ではむき出しの部材を見ることが少なくなりました。特に意識する木材はフローリングくらいでしょうか。古民家では柱、梁、板戸、板の間、腰板、違い棚等、あらゆる所に重厚な木材が見えます。しかも、それらの結合はいわゆる“木組み”によるものです。住宅内の場所によって使われる木材の種類も異なります。四季の違いが明瞭で、そのことを生かした材の用い方は日本家屋の重要な特徴であることに繋がる大切な疑問です。

★お風呂のお湯はどうやって沸かしたの？

旧東方村と大間野町の両中村家住宅には、今は風呂が設置されていません。かつては五右衛門風呂などがあったそうです。案内職員は風呂については説明しませんでした。児童からこの質問があったのです。更に両住宅には水回りの設備も外されています。そこにはないものを想像して疑問を持つということは、優れた感性の持ち主です。

このことに似た疑問も出ました。「昔の明かり体験」の後で、「^{ろうそく}蝋燭の“ろう”は石油や植物（^{はぜ}燻、^{うるし}漆）の他にには何から作るの？」という質問でした。石油や燻の話はしましたが、「他に」ということを何故思えたのでしょうか。

そして、これまでの社会科見学で最もハッとさせられた質問は次のことでした。

★何故、中村家住宅を保存しているのですか？

★この住宅の周りは、昔はどんな風景だったのですか？

このことは、文化財に関わる仕事をしている職員にとって、いつも念頭にあることです。世の中についてやその歴史・文化を学ぶ意義に関わるものがそこにはあります。

以上のような児童の発言には職員はドキドキしながらも、とても嬉しいものです。社会科見学の時には毎回「今日ではどんな言葉が聞かれるかな？」と楽しみにしています。

*今年最後の「古民家だより」をお届けしました。皆様、よい年を迎えられますようお祈りしています。